

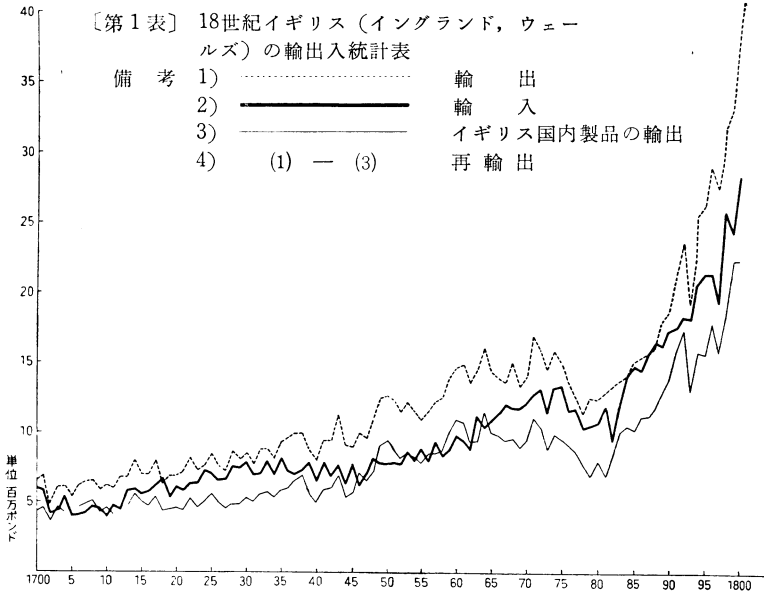
一八世紀イギリスの貿易構造

角 山 栄

は し が き

本稿は一八世紀イギリスの貿易構造とその変化のあとをたどることによって、一八世紀のイギリス経済の発展がどのように貿易面に投影されているかを検証せんとするものである。いうまでもなく、一八世紀前期はいわゆる重商主義体制の最盛期であり、一八世紀末は産業革命の成果が急速な生産力の上昇を示しつつ、イギリス産業貿易構造をいぢるしく変革しつつあったときに当る。

ここでまず、最新の成果によって一八世紀イギリス（正しくはイングランドおよびウェールズ）の輸出入統計を示したのが第一表である。⁽¹⁾第一表を一見して明らかかな点は、一八世紀前半は必ずしも順調な貿易の拡大がみられたわけではなく、むしろ輸出入とも総体的には停滞的であったということである。この点われわれが別稿において考察したように、一八世紀前期はいわゆる重商主義的保護政策にもかかわらず、貿易面においても一種の不況期を形成していたと考えてよいだろう。⁽²⁾これに対して、一七四〇年代の終り頃から明らかに貿易の発展がみられる。そして産業革命がはじまったとされる一七六〇年頃には、一八世紀のはじめと比べて貿易額はほぼ二倍となつている。その後アメリカ独立戦争中には一時的下落がみられるが、一七八〇年代及び九〇年代になると、も



つとも急斜面的な上昇カーブを描いており、産業革命の貿易面への影響はこの時代にこそもっとも集中的に看取されるのではないかと思われる。また、一八世紀中をつうじて再輸出を含めた輸出総額は、たえず輸入総額を上廻っており、いわゆる貿易収入の増加をつうじての資本の蓄積は、イギリスにきわめて有利に展開しつつあったと思われるのであるが、この点のちにものべるように再検討の余地がないわけではない。

ところで、われわれははじめにのべた趣旨にしたがつて、重商主義の一つのピークをなしていたと思われる一八世紀初頭の貿易構造と、産業革命に突入して生産ならびに貿易が飛躍的に発展しつつあった一八世紀末の貿易構造とを対照しつつ、その間の貿易構造の変化を貿易統計に依拠しつつのべてみたいと思うのであるが、この時代の貿易統計表を利用するに当って、それがもつ特徴と限界とを、あらかじめ史料批判的に検討しておく必要があるだろう。

註(1) Elizabeth Boody Schumpeter, *English Overseas Trade Statistics, 1697-1808*. (1960) Tables I, II, IV

(2) 拙稿「イギリス一八世紀前期は不況期か」経済理論 六二号。但し、最近一八世紀前期不況説に対する有力な反論がある。わたしたちに注目する必要がある。A. H. John, 'Aspects of English Economic Growth in the First Half of the Eighteenth Century' *Economica*, n. s. xxviii, no. 110 (1961)

一 一八世紀の貿易統計の史的価値

I 貿易統計の目的——国際収支の観点——

ここで利用される一八世紀イギリスの貿易統計は、輸出入の貿易総監 (inspector-general) として知られた役人の作成したものであり、数字はすべてつぎの二つの原資料にもとづいている。すなわち、一つは『イングランドの輸出入台帳、一六九七—一七八〇』Ledgers of Imports and Exports of England and Wales from 1697 to 1780. 他は『イギリスの航海、商業、収入の状態にかんする報告書、一七七一—』Reports on the State of the Navigation, Commerce, and Revenues of Great Britain for the years 1772 onwards である。この二つの数列はオーヴァーラップしているために、全一八世紀についての連続的数列を示すことができる。といつても、こんにちの水準からみれば、もとより統計それ自身には少なからず欠陥が目につくけれども、当時としてはフランスやオランダにもまだこれだけのまとまった貿易統計は⁽¹⁾なく、先進国イギリスの面目を伺うことができるとともに、歴史家にとってはきわめて貴重な資料となっている。

さて、イギリス一七世紀末において輸出入貿易総監が任命され貿易統計が作成された本来の目的は、イギリスと他国民との国際収支についての知識を提供するという重商主義的バランス政策にあった。したがって、『輸出

入台帳』は貿易された個々の商品を細かな品目に分けた上で、それらの商品の輸出・輸入先を国別に分類し、そしてたいいていの場合、それらの商品の数量と単価が詳述されている。それによって個々の国民との貿易額とバランスを算出するのが目的であった。⁽²⁾

そのような目的にてらすかぎり、第一表においてみたように、各国別のバランスはともかく、全体として、多くの年において輸出総額は輸入総額よりも大であつて、数字の上では一応所期の目的は達成されているようにみえる。けれども、実は輸出入の数字にはつぎのようなからくりがあつた。すなわち、輸出の数字は外国の港で引渡されるときの商品の価値、つまり保険料と運送費を含んだ価値であり、一方輸入の数字は、外国における出港のときの価値をあらわしており、したがつて保険料や運送費のコストを含んでいないと考えられるのである。

『輸出入台帳』は国際収支の知識をめざしながら、こうした貿易外勘定を正しく把えていないことのほか、つぎのような勘定も考慮外におかれている。⁽³⁾ たとえば、ニューファウンドランドの海岸でイギリス人漁夫が補獲した魚を直接外国人に販売してえた所得とか、イギリス船舶が外国の港間の運送でえた運送費、⁽⁴⁾ 外国船舶に対するイギリスの保険契約料、海外におけるイギリス役人や代理人の所得、イングランドに住むアイルランドや植民地地主の収入のごとき貿易外収入が無視される一方、貿易外支出では、植民地で建造され、イングランドに住む商人などに販売された船舶、あるいはイギリスの株式を所有する外人株主への配当支払についてもまったく考慮が払われていない。⁽⁵⁾

こうして、一八世紀の貿易統計がその意図にもかかわらず、国際収支の考察にはほとんど直接役立ちえないことは明らかである。⁽⁶⁾

註(1) ただし、ヌウヘーデンは一七三八年ならし三九年から詳しく貿易統計が存在している。E. F. Heckscher, "Multi-lateralism, Baltic Trade, and the Mercantilists" *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. iii, no. 2. (1950) p. 225.

(2) G. N. Clark, *Guide to English Commercial Statistics, 1696-1792*. (1938), p. 7; T. S. Ashton, *An Economic History of England: the 18th Century*. (1955) pp. 150-51.

したがって、『台帳』の基本的分類は地理的であった。それによって個々の外国との貿易の発展や変動を跡づけんと欲するものとしては、そのような配列は便利であるけれども、特定の商品の貿易についての知識を『台帳』に求めんとするのは厄介な作業をしなければならぬ。すなわち、特定の商品についての一年間の輸出・輸入の統計をえるためには、八〇—九〇の個々の数字を抽出しなければならぬ。こうしためんどうな作業をおこなって作成された統計が E. B. Schumpeter, *British Overseas Trade Statistics, 1697-1808*. (1960) の如き。

(3) T. S. Ashton, *op. cit.*, p. 151.

(4) cf. R. Davis, "Earnings of Capital in the English Shipping Industry, 1670-1730." *Journal of Eco. Hist.* vol. xvii, no. 3. (1957)

(5) この点については、すでに当時 Henry Martin (三代目の貿易総監) によって指摘されていたところである。G. N. Clark, *op. cit.*, p. 22.

(6) しかし、それは短期の景気変動を跡づける目的には大へん役立つであらう。こうした見地から、ファンネトンは一八世紀貿易における景気変動を分析した。T. S. Ashton, *Economic Fluctuations in England, 1700-1800*. (1959) pp. 53-83.

II 公定単価の問題

さきにものべたように、『輸出入台帳』には各商品の公定単価が記され、それに取引量を乗ずることによって貿易額を算出するという方法がとられている。ところが、公定単価は時価でないために、長期分析に貿易額を利用するには、少々めんどうなことが起る。しかし、始めのうちには公定単価の時価への接近が試みられた。すなわち、初代の貿易総監ウィリアム・カリフォード (William Culliford) は、各商品の公定単価を決定するに当って、

外国貿易に従事している商人たちと相談し、設定後一、二年間は、若干の商品について、その公定単価を時価の変動と密接な関係におくために改訂を施した。カリフォードの後継者であったチャールス・ダヴェナント (Charles Davenant) およびヘンリー・マーチン (Henry Martin) もしばしば同様な改訂を試みたのであるが、一七二〇年代の終り頃には、そうした改訂の試みは事実上中止されてしまい、商品の公定単位はもとのまま放置された。それがために物価騰貴がいちじるしかった一八世紀末になれば、古い公定単価は時価からまったくかけ放れてしまうという事態が起った。すなわち、一七八一年に護送税 Convoy duty が課せられたとき、商人たちは彼らの輸出した商品の価値を申告することを要求せられたが、そうした商品についての商人の申告価格 (Declared price) はほぼ時価を示しているものと考えてよい。⁽¹⁾ところがそのときの商人の申告価格と、古い公定単価とを比べてみると、なかには公定単価の方が高いものもあつたけれども、一般的にいつて公定単価の方が申告価格よりもいちじるしく低かつたことはいうまでもない。⁽²⁾したがって、第一表に示した輸出入統計は公定単価によつてゐるから、たとえばイングランドおよびウェールズの輸入額は一七〇一年の五九〇万ポンドから一八〇〇年には二八四〇万ポンドに増加し、他方輸出額も六九〇万ポンドから四〇八〇万ポンドへ増加しているというわけ⁽³⁾で、輸入が約五倍、輸出が約六倍増加したと主張するのは、決して正しい結論でないことに注意する必要がある。⁽⁴⁾

ところで公定単価のもつ欠陥については、すでに初期の貿易総監自身がよく承知していたところで、従つてさきにも述べたような時価への接近的改訂の試みがなされたのであるが、やがて貿易総監自身、むしろ基準価格を改訂しないで一定にしておく方が、一見して輸出入の商品数量の増減を知ることができる⁽⁵⁾とさえ考えるようになった。だから、第一表の貿易統計は一八世紀はじめの基準価格商品の数量的増加を示しているにすぎない。とい

って、それは数量的増加を正しく反映しているかどうか、つまり、第一表の数字は価値を正確にあらわしていないにしても、それでは果して貿易量の増減がある程度正しくあらわしているものと考えることができようか、つぎにこの問題について若干ふれておきたい。

註(1) ちなみに、当時の有能な貿易総監であった Thomas Irving は、多くの製造品に対して、申告価格と公定単価とのちがいの比率を示すリストを提示した。T. S. Ashton, *An Eco. Hist. of England: the 18th Century*, p. 152.

(2) たとえば、ビーバー帽、リンネン、帆布がそれである。

(3) 未精錬銅の申告価格は公定単価を一四〇九%こえていたが、これは極端な例で、その他鍛鉄は一〇三%、毛織物で三八%こえていた。

(4) 一八〇〇年における大ブリテンの輸入の公定価値は三〇六〇万ポンド、同じく輸出は四三二〇万ポンド。これに対して Irving は実質市場価値で輸入を五五四〇万ポンド、輸出を五五八〇万ポンドと計算してゐる。T. S. Ashton, *op. cit.*, p. 152.

(5) Henry Martin 自身、こうした批判と見解を、その二著のなかで展開してゐる。すなわち、*Observations upon the Account of Exports and Imports for 17 years ending at Christmas 1714*, 及び *An Essay towards finding the Balance of our Whole Trade Annually from Christmas 1698 to Christmas 1719*, がそれである。また G. N. Clark, *op. cit.*, に収録されてゐる。esp. p. 63, pp. 69-71. なお後者は無署名であるが、それが H. Martin の著であることは、マントンの考証によらぬ。B. E. Schumpeter, *op. cit.*, Introduction by T. S. Ashton, p. 3.

III 貿易商品数量の問題

ここでの問題は、主として、通関申告の際における商品数量の過大・過少申告の問題と、貿易統制からくる密貿易の横行、したがってそれらにもとづいて貿易数量を再検討しなければならないという問題である。

一八世紀においては、他の時代におけるように、輸出品に関税がかけられるような場合は、商人たちは輸出商

品の数量を過少に申告する傾向がある。また輸出奨励金 (bounty) がついていたり、あるいは再輸出に対する戻税 (drawbacks) がついている商品の数量については、逆に過大に申告する傾向がある。

いま、一八世紀における輸出関税政策を概観しておくこととつぎのごとくである。

一七世紀中頃以降、輸出関税は総じて漸減政策がとられ、名譽革命以後にはさらに進んで、国内製造業振興のために輸出関税を撤廃する政策がとられた。すなわち、一六九一年には豚肉、牛肉、バター、チーズ、ローソク
の輸出関税は廃止され、一六九九年には羊毛製品、穀物、肉類、パンその他多くの商品に対する輸出関税が廃止されたことは決定的な意義をもっている。とくに羊毛製品に対する輸出関税は、一五五七年の大幅な税率引上げ以来、王室財政の大きな収入源を提供してきたので、その廃止の意義はきわめて大きい。ついで一七〇九年には、イギリス船舶に積み込まれる限りにおいて、石炭の輸出税が廃止された。しかしこうした一連の輸出関税撤廃政策は、一七二二年ウォルポールによってほぼ完成され、外国船舶に積み込まれる石炭、鉛、馬、未仕上げ毛織物など一四―五品目を除き、大部分の製造品に対する輸出関税は廃止された。⁽¹⁾ そればかりでなく、国産品の輸出奨励のために、穀物、帆布、リンネン、絹、キャリコ、紙、滑し皮、石鹼、ビールその他重要品に対して輸出奨励金または戻税がひきつづき課せられた。関税免除品の数は一七八〇年代のピットの関税改革によって増加したが、フランスとの戦争中、新しい輸出関税が課せられてその数は再び減少した。

ところで、こうした一八世紀の輸出関税政策によって、貿易統計がどれだけ過少申告ないし過大申告の影響をうけたかは言明できない。けれども、シュムペーター女史はその影響は大したものではなかったであろうという。⁽²⁾ それよりか問題なのは、むしろ密貿易の問題である。それは完全に官憲の眼からのがれていた貿易であり、と

くに一八世紀におけるそれは、高率関税、ある種の商品に対する輸出入の禁止、あるいは航海法による貿易制限の自然的結果である。

密貿易は密輸出と密輸入とに分けられる。まず密輸出については、かの一七二一年のウォルポールの政策によってたいいの輸出品に対する関税は撤廃せられたために、密輸出の必要はあまりなかったと考えられる。けれどもなお輸出禁止がしかれている商品があった。たとえば羊毛がそれである。したがって、密輸出の主な対象となった商品は、そうした禁制品であったわけであるが、それがイギリス輸出量に大きな比重を占めていたと考えられることは危険であろう。⁽³⁾

これに対して密輸入の方は広くおこなわれていた。一八世紀の密輸入品のなかでもっとも重要なものはタバコと茶とであった。⁽⁴⁾とくに茶は、東インド会社の船員のなれあいによる密輸入が若干あったほかは、大部分はヨーロッパ市場から直接密輸業者によって運び込まれたものである。密輸商品は全輸入額（公定単価による）の $\frac{1}{6}$ を占めていたといわれるから、貿易総監の数字は長期ないし中期の貿易量の増減を示す正確な指標となりえないであろう。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

以上、一八世紀イギリスの貿易統計の問題点を二、三指摘したわけであるが、なお残された問題がないわけではない。けれども、それらの問題点については行論の折にふれることとして、まず以上の三点にあらかじめ注意を促しておいた上で、つぎに実際の貿易統計についてイギリス一八世紀の貿易構造とその変化を論じてみたい。

註(1) John Clapham, *A Concise Economic History of Britain*, (1951) p. 282.

- (2) E. B. Schumpeter, *op. cit.*, Introduction by T. S. Ashton, p. 6.
 (3) *Ibid.*, p. 6.
 (4) Alfred Rive, "A Short History of Tobacco Smuggling" *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. x, no. 3. (1958)
 in *Eighteenth-Century Smuggling*.
 (5) 茶の場合は、全密輸商品の $\frac{1}{2}$ を占めていた。W. A. Cole, *op. cit.*, p. 409.
 (6) なお、舶来の商品はときどき密輸入され、そしてイギリス製品として外国に輸出された。したがって公定単価は、再輸出の真の量を過少に記録する傾向がある。

一一 一八世紀初頭の貿易構造

第二表は一八世紀はじめのイギリス海外貿易を地域別に分類したものである。⁽¹⁾

まず、輸出入市場として北西ヨーロッパと南ヨーロッパ(両者併せて約八〇%弱)とが圧倒的に重要性をもっていたこと、および再輸出の約六〇%が北西ヨーロッパであったことが注目される。これに対して、輸出入市場は同じく北西ヨーロッパ、南ヨーロッパのほか、東西両インド市場が重要であった。これによって国際収支を判断することは、さきにものべたように若干疑問がある

〔第2表〕

18世紀はじめのイギリス海外貿易(1699~1701の平均)(単位、£000—公定単価)

	I	II	III	IV	V	VI	計
輸入	1,418	583	1,555	430	1,107	756	5,849
%	24.2	9.9	26.5	7.3	19.7	12.9	100
輸出	1,859	255	1,484	174	539	122	4,433
%	41.9	5.7	33.4	3.9	12.1	2.7	100
再輸出	1,163	80	224	193	312	14	1,986
%	58.6	4.0	11.2	9.7	15.7	0.7	100

備考

- I 北西ヨーロッパ……ドイツ、オランダ、フランダース、フランス。
 II 北ヨーロッパ……ノルウェー、デンマーク、バルチック海地域
 III 南方地方……スペイン、ポルトガル、及びその所属諸島、地中海地域。
 IV ブリテン諸島……スコットランド、アイルランド、海峡諸島。
 V 栽植植民地……北アメリカ、西インド
 VI 東インド

るけれども、北西ヨーロッパにおける圧倒的な輸出超過は、他の諸地域の輸入超過を補ってなお余りあったことが分る。したがって、北西ヨーロッパとくにオランダこそ一八世紀初頭のイギリス最大の市場であった。⁽²⁾以下順を追って、各地域別の貿易構造を検討してみたい。第三表―第七表はいづれも第二表を地域別に詳しく分析したものである。

I 北西ヨーロッパ

〔第3表〕 北西ヨーロッパとの貿易
(1699~1701の平均, 単位 £000)

輸 入 :	1,418	1,015
内 訳		
工業製品	798	
リンネン	79	
糸	138	
その他	108	
食糧	295	
原料	141	
織物	41	
染料	26	
木の	87	
その他		
輸 出 :	1,859	1,453
内 訳		
工業製品	1,354	
織物	81	
糸	232	
食糧	105	
穀	92	
魚	35	
その他	192	
原料	70	
鉛	46	
錫	76	
その他		
再輸出 :	1,163	379
内 訳		
工業製品	239	
キャリコ	116	
絹	24	
糸	584	
食糧	255	
砂糖	232	
タバコ	29	
胡椒	68	
その他	200	
原料	57	
絹	51	
その他	92	

この地域はイギリス最大の輸出市場である。この輸出品の大宗を占めていたのはいうまでもなく毛織物であった。イギリスの輸出品目中、毛織物が占める割合は、一七世紀後半以降に減少しつつあったとはいえ、なお最大の輸出品目であって、その約半分が中世末以来の伝統的市場であるこの地方へ向けて輸出されていたのである。またこの地方は、再輸出総額の約六〇%を占め、再輸出の最大市場を形成していた。再輸出の主な品目はキ

ヤリコ、タバコ、砂糖、絹などであった。

ところで、イギリスの全輸入額の約³を占め、輸入市場としても大きな比重をもっていたこの地域は、主としてドイツ産のリンネンを供給していた。当時イギリスへ輸入されたリンネンは、のちにものべるように若干のアイerland産のものを除けば、ドイツのリンネンが大量にイギリスへ入ってきていたのである。

しかし、ここで注意すべきはフランスとの貿易である。第三表の輸入食糧品とあるのは、そのうちの約半分がフランスから輸入されたブドー酒、ブランデーから成っている。フランスとの貿易は、ブドー酒などの奢侈品を輸入する不生産的な片貿易的性格をもっていて、当時東インド会社問題をひき起したと同じような逆貿易的性格が、外交上における英仏两国の不和とあいまって、朝野の論議をまきおこしていた。⁽³⁾けれども、最近の研究によれば、従来信じられていたほどは赤字大きくなかったといわれる。⁽⁴⁾

II 北ヨーロッパ

第二表から明らかのように、この地域は全貿易額からいえば、それ程大きな比重を占めていなかったが、イギリス海運業にとって基幹的な重要性をもっていた。というのは、第四表が示すように、この地域との貿易の特徴は、亜麻・大麻、鉄・鋼、木材のごとき船舶必需品の輸入に依存していたからである。したがって、毛織物など少量の輸出はあるが、全体としてみれば輸入超過である。

輸入超過は銀の輸送で決済されたから、東インドと並んで、この地域への銀の流出は大量にのぼったといわれているけれども、この地域はインドのように必ずしも銀本位制をとっていなかったから（たとえば、スウェーデ

〔第4表〕 北ヨーロッパとの貿易
（1699—1701の平均、単位 £000）

輸入：	583	
内訳	工業製品	59
	食糧品	9
	原料	515
	（亜麻，大麻	185）
	鉄，鋼	149
	木，材	96
	その他	85
輸出：	255	
内訳	工業製品	202
	（毛織物	190）
	その他	12
	食糧品	29
	原料	24
再輸出：	80	
内訳	工業製品	3
	食糧品	68
	（タバコ	56）
	その他	12
	原料	9

ンは銅を中心とする銅銀複本位）、銀の流出はそれ程大量にのぼらなかったともいわれている。⁽⁵⁾

Ⅲ 南方地方

この地方は北西ヨーロッパについてイギリスの重要な輸出市場である。しかも、この地域からの輸入額は総輸入額の $\frac{1}{4}$ をやや越えており、一八世紀はじめの輸入市場としては一位をランクしている。再輸出額を加えて、わずかに輸出が輸入をこえている。

ところで、この地域への輸出の最大品目は毛織物であって、さきにも述べた北西ヨーロッパへの輸出とほぼ匹敵する輸出額を占め、イギリスの二大毛織物市場を形成している。そして北西ヨーロッパが中世末以来の伝統的な毛織物市場であったのに対し、ここは新興の毛織物市場である。すなわち、イギリスの毛織物工業が一七世紀中頃以降急速に紡毛織物から梳毛織物生産へ革新的発展をとげたのに対応して、薄手の梳毛織物市場が、地中海方

〔第5表〕 南方地方との貿易
(1699—1701の平均, 単位£000)

輸入:	1,555		
内訳	工業製品	111	
	絹	83	
	その他	28	
	食糧	747	
	ブドウ	496	
	酒	165	
	その他	86	
	原料	697	
	絹	302	
	羊毛	73	
	染料	92	
	油	117	
	その他	113	
輸出:	1,484		
内訳	工業製品	1,274	
	織物	1,201	
	その他	73	
	食糧	128	
	魚	80	
	その他	48	
	原料	82	
再輸出:	224		
内訳	工業製品	64	
	キャン	36	
	リン	13	
	その他	15	
	食糧	121	
	胡椒	63	
	タバコ	41	
	その他	17	
	原料	39	

面およびスペイン、ポルトガルの西インド植民地に拡大されたのである。⁽⁶⁾一七〇二—一三年のスペイン王位継承戦争は、この広大な毛織物市場にして同時に金銀の宝庫であったスペイン領植民地の遺産をめぐるイギリス・フランスの血みどろの死斗である。⁽⁷⁾

ところで、第五表はスペイン、ポルトガル、地中海方面がたんに毛織物市場として重要であったばかりでなく、ブドー・酒・ブランドーの輸入市場として、たえず敵対関係にあったフランスにかわる重要性をもっていたことを示している。けれども、第五表には含まれていないけれども、スペイン、ポルトガル（とくに一七〇三年のメシエン条約以後）からは大量の金銀が輸入されたことは注目する必要があるであろう。いったい、スペイン領西インドからスペイン本国に輸入された銀は、イギリスとオランダ両国によってほぼ切半されるかたちで流出した。イギリスに流入した銀は、東洋および北西ヨーロッパの決済にあてられるために再び流出した。けれども、さき

にのべたように北西ヨーロッパへの銀の流出はそれ程大したことはなかったといわれるから、イギリスからの正貨の流出は、主として銀本位制をとっていた東洋とりわけインドへの銀の流出であったと想像される。⁽⁸⁾

こうしてこの地域との貿易は、主として毛織物を輸出し、奢侈品たるブドー酒を輸入するほか、東インド貿易に欠くべからざる銀を獲得するという、イギリスの商業ならびに工業発展の枢要的地位を占めていたといつてよい。⁽⁹⁾

IV ブリテン諸島

[第6表] ブリテン諸島との貿易
(1699—1701の平均, 単位 £000)

輸 入 :	430	
内訳	工業製品	107
	リンネン	57
	その他	50
	食糧品	46
	原料	277
	羊毛	122
	牛脂	84
	その他	71
輸 出 :	174	
内訳	工業製品	86
	食糧品	42
	原料	46
再輸出 :	193	
内訳	工業製品	45
	食糧品	125
	タバコ	91
	砂糖	21
	その他	13
	原料	23

ここで重要なのは、アイルランド植民地とのあいだにおけるリンネン、羊毛の輸入貿易である。

植民地のなかでもっともイングランドに近いところで羊毛工業を発展させはじめていたアイルランドは、一六九九年「アイルランドおよびイングランドから外国への羊毛輸出を阻止し、イングランドにおける羊毛工業を奨励するための法令」によって、イギリス毛織物工業を保護奨励せんとする重商主義政策の犠牲となった。⁽¹⁰⁾これが

ために、アイルランドはその毛織物を植民地を含めた外国への輸出を禁止され、原料の羊毛と穀物を本国へ供給すること、本国産業と直接競合しないリンネンの生産にわずかに活路を見出さざるをえなくなる。

V 栽植植民地

〔第7表〕 栽植植民地との貿易 (1699—1701の平均, 単位 £000)

輸入:	1,107	
内訳	工業製品	0
	食糧品	925
	砂糖, 糖蜜	630
	タバコ	249
	その他	46
	原料	182
	染料	85
	その他	97
輸出:	539	
内訳	工業製品	475
	毛織物	185
	絹	36
	金物類	73
	その他	181
	食糧品	55
	原料	9
再輸出:	312	
内訳	工業製品	252
	リンネン	157
	キャリコ	45
	その他	50
	食糧品	34
	原料	26

この地域との貿易は、砂糖、糖蜜、タバコなどのプランテーションの特産物の輸入に特色があった。したがって、いちじるしい輸入超過となっている。その輸入品の大部分は、そのまま再輸出されたか、あるいは国内で加工された上で再輸された。とくに西インド諸島およびアメリカ南部植民地との取引は、やがて一八世紀中頃にはイギリス貿易のもっとも活況的部分となる。西インド諸島だけでイギリスの全輸入の約1/4を供給することとなる。サウルはつぎのようにのべている、「これら発展しつつある植民地との貿易の独占の価値は、生産力水準と購買力水準とが他方では除々にしか上昇していかない時代にあつては、重要であり且つ国内における工業発展のための

刺戟と資本を提供するに大いに役立った」と。⁽¹²⁾

VI 東 イ ン ド

〔第8表〕 東インドとの貿易
(1699—1701の平均, 単位 £000)

輸 入 :	756	
内 訳		
	工業製品	552
	キャリコ	367
	絹	107
	その他品	78
	食糧	134
	胡椒	103
	その他料	31
	原 絹	70
	その他	42
	28	
輸 出 :	122	
内 訳		
	工業製品	111
	毛織物	89
	金の類	10
	その他品	12
	食糧	2
	原 料	9
再輸出 :	14	

業たる毛織物工業と利害の対立を生み出すほどの重大な影響をもち始めた。そこで東インド会社のキャリコ輸入の是非をめぐる激しい論争をひきおこしたが、一七〇一年および一七二二年の法令によってキャリコの使用は禁止され、保護主義の側の勝利となった。第八表は、東インドからの輸入のうちキャリコが約半分を占め、いかにそれが莫大な輸入額に達していたかを示すとともに、他方第三表、第五表、第七表において示唆されているように、その輸入キャリコのかかなりの部分が再輸出されていること、およびその再輸出の大部分が北西ヨーロッパ市場へ向けられたことが分る。

第八表は、正貨の輸出を含んでいないので、どれだけの正貨とくに銀が東インドへ流出したか明らかでないけ

一七世紀はじめ東インド会社が設立されて以来、東インドとの貿易は東南アジア、シナの特産物である香料と絹の輸入、これに対してイギリスからは銀を輸出するという特徴を保持してきたのであるが、一七世紀の六、七〇年代以降、急速にインド産のキャリコの輸入が増大しはじめ、ついにキャリコ輸入がイギリスの国民的産

れども、少くとも一八世紀中頃までは年々イギリスからの銀の輸出は増大⁽¹³⁾し、それがためにイギリス国内の銀貨不足をひきおこす一方、金の豊富な流入とあいまって、一七七四年に複本位制の廃止↓金本位制の確立への最初の前進的処置をとらしめることとなるのである。⁽¹⁴⁾ ちなみに、一八世紀中頃以降、キャリコにかわってシナ産の茶が急に重要性を帯びて登場してくるのであるが、この点についてはのちほどふれるであろう。

ま と め

中世末から一七世紀中頃までのイギリス外国貿易の性格は、一貫して農村工業の産物である毛織物の輸出貿易という性格をもっていた。すなわち、一六七〇年頃までは、ロンドンからの輸出の八〇—九〇%は毛織物であった。毛織物輸出がさかんなときはイギリス経済の全体が繁栄し、逆に毛織物輸出が不況になると、毛織物製造業者や羊毛生産者ともより、労働者も苦境におちいり、解雇されて、失業者が町にあふれるといった深刻な事態をひき起⁽¹⁵⁾した。

ところが、一七世紀末から一八世紀はじめになると、イギリス貿易は新しい性格をもつようになった。毛織物はなおも輸出品目中首位を占めていたけれども、もはやそれはいままでのような決定的な優位を占めていなかった。すなわち、一六九九—一七〇一年にはイギリスの輸出のわずかに四七%しか毛織物は占めていなかった。⁽¹⁶⁾ それにかわって新しく輸出面にあらわれてきた発展は——市民革命以前にはほとんど現われていなかったけれども——主としてアメリカ、西インド諸島や東洋の生産物の再輸出の発展であった。それはいまや全輸出額の約三〇%を占めていた。ちなみに、一六四〇年においては、再輸出は全輸出の三—四%を占めていたにすぎない。⁽¹⁷⁾ この

ような発展を反映しているものは、第二表にみられるようなアメリカや東洋からの輸入のいちじるしい増大である。こうしてイギリス海外貿易は、全体としてはなほだしくヨーロッパ外的世界に依存することとなった。R・デイヴィスはこのようなイギリス貿易の変化を一種の革命とさえみている。⁽¹⁸⁾

こうした外国貿易の構造的変化がイギリス経済にどのような影響をもたらしたか。それはまず輸出産業への投資を増大せしめたほか、注目すべき点は、再輸出の発展は決して国内産業への投資を誘発しなかったことである。むしろ商人たちは内外商業の発展に対応するために、その方面に多くの資本を必要とした。したがって、イギリス仲介貿易の発展は、工業投資を伴わないで商業への大量投資をひきおこしたのであった。⁽¹⁹⁾ 名誉革命以後のイギリス重商主義の性格については、論争のあるところであるが、それが産業資本のための政策であったにせよ、また商業資本ないし初期資本のための政策であったにせよ、こうした外国貿易の構造的変化を無視しては、語りえないであらう。

- 註(一) R. Davis, "English Foreign Trade, 1660-1700." *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. vii, no. 2. (1954) pp. 163-65. 466作成。
- (二) cf. E. F. Heckscher, "Multilateralism, Baltic Trade, and the Mercantilists." *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. iii, no. 2. (1950) pp. 226-27.
- (三) 拙著『資本主義の成立過程』(昭三二)二二九頁以下。
- (四) M. B. Priestley, "Anglo-French Trade and the unfavourable Balance Controversy, 1660-1685." *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. iv, no. 1 (1951)
- (五) E. F. Heckscher, *op. cit.*, p. 226.
- (六) Charles Wilson, "Cloth Production and International Competition in the Seventeenth Century." *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. xiii, no. 2. (1960) pp. 210-13.

- (7) 大塚久雄「スウェーデン継承戦役の経済的背景——一八世紀初頭のイギリス重商主義の一面——」、同「一八世紀初頭に於けるイギリスの対スウェーデン貿易」(ふづれも同著『近代化の歴史的起点』(昭二三)所収)参照。
- (8) E. B. Schumpeter, *op. cit.*, Table I を参照。
- (9) 大塚久雄著『近世歐洲經濟史序説』上、第一篇、第二章。
- (10) マイランダの羊毛工業を禁圧すべきか否かをめぐって、実は朝野にかなりの論争があった。それは同時代のもっとも激しい論争をひき起したかの東インド会社のインド産キヤリコ輸入をめぐるトーリーとウイングの論争とはやや性格を異にしており、むしろ国王と下院との政治的紛争をつうじてクローズ・アッブされたアイルランド問題が、他面經濟問題として、イギリス羊毛工業との関係において論議された背景をみのがすことはできない。W. Cunningham, "The Repression of the Woollen Manufacture in Ireland", *English Historical Review*, vol. i. しかし、一六九九年の「アイルランド羊毛工業禁圧令」は、イギリス毛織物工業における初期資本の利害、とりわけアイルランド西部の織元の利益と結びついていたことは明らかである。H. F. Kearney, "The Political Background to English Mercantilism, 1695-1700.", *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. xi, no. 3. (1959) pp. 485-86.
- (11) cf. C. Gill, *Rise of the Irish Linen Industry*. (1925)
- (12) B. S. Saul, *Studies in British Overseas Trade, 1670-1913*. (1960), pp. 7-8.
- (13) E. B. Schumpeter, *op. cit.*, Table I, を参照せよ。
- (14) H. Heaton, *Economic History of Europe*, revised ed. (1948), p. 370.
- (15) 拙著『イギリス毛織物工業史論』(昭三五)第四章。
- (16) R. Davis, *op. cit.*, p. 150. しかし、実際の毛織物輸出は上の数字よりも下廻るにせうとされる。Phyllis Deane, "The Output of the British Woollen Industry in the Eighteenth Century" *Journal of Eco. Hst.* vol. xvii, (1957), pp. 209. 213.
- (17) F. J. Fisher, "London's Export Trade in the Early Seventeenth Century". *Eco. H. R.* 2nd ser., vol. iii, (1950) p. 154.
- (18) R. Davis, *op. cit.*, p. 162.
- (19) *Ibid.*, p. 162.

三 一八世紀後半の貿易構造

(一) 輸入構造

第九表は一八世紀後半のイギリスの輸入構成を、一八世紀初頭のそれと比較したものである。⁽¹⁾

嗜好食糧品——第九表で嗜好食糧品 (grocery) とするのは、茶、コーヒー、タバコ、砂糖、米、胡椒その他の熱帯産・亜熱帯産、または東洋産の食糧品を指している。これらのうち、砂糖、糖蜜が価値において最大の品目であった。砂糖について重要なものは、東インド会社がシナから輸入した茶であった。イギリスに輸入された食糧品の約半分はふつう再輸出されたが、嗜好食糧品の輸入は一八〇〇年には全輸入額の三五%を占め、一八世紀前期と比べるとその輸入貿易における重要性は一そう増大している。

リンネン——一七〇〇年に輸入の第二位を占めていたリンネンは、一八世紀をつうじてしだいにその地位を下していった。すなわち、リンネンははじめ主としてドイツおよびバルチック海諸国から輸入されていた。ここでは麻の準備・紡糸工程の労賃が安かったからである。けれども大量の未仕上げ麻織物は、最初はオランダからしかしのちには主としてアイルランドからの輸入が増加した。というのは、一七四二年に付加関税が外国産のリンネンに課せられ、そしてその関税の利益をもってイギリス産リンネンのみならずアイルランド産のリンネンの輸出のための輸出奨励金を支払うために宛てられたからである。

インド産のキャリコ・反物——これは一八世紀をつうじてイギリス輸入貿易の五―六%を構成していたけれども、イギリス国内におけるキャリコ使用禁止（一七〇一年、一七二一年の法令）によって、そのほとんどすべて

〔第9表〕
イギリス18世紀後半の輸入構成(%)

	1700	1750	1772	1790	1800
嗜好食糧品	16.9	27.6	35.8	28.9	34.9
リソネ	15.6	14.8	10.4	8.5	5.6
キャリコ	5.9	5.3	6.5	5.1	4.5
絹	6.3	3.5	7.0	5.3	2.4
亜麻・大麻	3.0	6.1	3.6	4.1	4.3
棉花	—	0.9	1.2	5.0	6.0
染料	1.0	1.5	4.7	5.1	4.2
木材	4.0	4.2	2.2	2.3	2.1
ブドウ酒	10.8	4.7	2.8	3.8	2.4

は再輸出されたであろう。

その他の繊維製品——トルコ、イタリヤ、インドからの絹糸、撚絹の輸入は減少の傾向をみせ、また亜麻・大麻の大陸からの輸入は一八世紀をつうじてたえずコンスタントの比率を保持しており、この傾向は一九世紀前半においてさえ不変である。⁽²⁾

棉花——一八世紀後半の輸入面におけるもつとも注目すべき点は、レヴァント、西インド諸島、ついでアメリカ大陸からの棉花輸入がいちじるしく増大していることである。一七〇〇年において全く輸入がみられないにかかわらず、一七五〇年以降急速に頭角を現わしはじめ、一八〇

〇年には忽ち全輸入額の六%を占めるにいたっている。これはいうまでもなく、のちにのべる綿織物輸出の急速な発展とともに、イギリス木棉工業における産業革命の進展を反映している。

木材——家屋、船舶の建造に必要な木材については、イギリスはバルチック海に依存していた。大麻、ピッチ、タールその他の船舶必需品についても同様である。一七〇五年、植民地からの船舶必需品の輸入に奨励金が与えられたにもかかわらず、ひきつづきそれらは北部ヨーロッパの供給に依存していた。

ブドウ酒——輸入ブドウ酒の多くはホルトガルからもたらされた。というのは、フランスのブドウ酒には禁止的な関税が課せられていたからである。一八世紀のはじめには、ブドウ酒の輸入は大量にのぼったが、一八世紀末にはあまり重要な地位を占めなくなっていた。高率関税にもかかわらず、大量のフランス製ブランデーが輸入

され、また密輸入された。

穀物——穀物は注目すべき動向を示している。それは一七六五年までは輸出商品であった。ところが、一七六五—七四年および一七九二—一八一四年のあいだ、穀物輸出に支払われる輸出奨励金はほとんどその間支払われず、それどころか、外国穀物は税率を引き下げられたり無税で輸入が認められた。そして穀物輸入は年ごとに増大し、一七七二年には全輸入のわずか〇・七%を占めるにすぎなかったが、一七九〇年には四・四%に、一八〇〇年の飢饉の年には八・七%へと増大した。

まとめ——一七五〇年以降のイギリス輸入貿易の主な特徴をまとめてみると、つぎのごとくである。

1 西インドおよび東洋からの食糧品輸入が全輸入の巧近くを占める程重要性を増し、とくに砂糖、コーヒー、茶の地位が増大したこと、しかもこれらの輸入食糧品の大部分は再輸出されたことである。しかし、こうした仲介貿易の繁栄は、決して一八世紀後半以降の新たな発展ではなく、一八世紀はじめの貿易構造のたんなる拡大的展開にすぎなかった。

2 食糧品について繊維関係の輸入が重要であったが、そのなかでリンネンの役割が低下し、国内産業のための原料とくに棉花、染料が一八世紀末に急激に増大した。これは明らかに、木棉工業がいちじるしく発展しつつあったことを反映している。（綿糸、綿織物の輸出の項を併せて参照せよ）

3 穀物は、一八世紀前期の輸出商品の地位から、一八世紀末期には輸入商品の地位へ逆転したばかりか、一そう輸入増大の傾向が顕著になったことである。これはいうまでもなく、一八世紀後半以降の急激な人口増大とくに都市の工業人口の増大による穀物需要激増を反映しているであろう。

註(1) E. B. Schumpeter, *English Overseas Trade Statistics, 1679-1808* (1960), p. 11. など以下の叙述は *Ibid.*, pp. 11-2. におけるフシエトンのコメントに負うところ大である。

(2) A. D. Gayer, W. W. Rostow and A. J. Schwartz, *The Growth and Fluctuation of the British Economy, 1790-1850*, (1953) vol. ii, p. 784.

(二) 輸出構造

第一〇表⁽¹⁾は一八世紀後半のイギリスの輸出構成を、一八世紀初頭のそれと比較したものである。

第一〇表によれば、一八世紀をつうじて、毛織物、リンネン、絹織物、綿織物、綿糸など繊維工業の生産物の輸出が支配的であった。それは一八世紀のはじめ、および末期において全輸出の $\frac{3}{4}$ を構成していた。けれども同じく輸出繊維品のなかでも、その品目構成にはきわめて注目すべき変化がみられる。

[第10表]
イギリス18世紀後半の輸出構成(%)

	1700	1750	1772	1790	1800
物	57.3	45.9	42.2	34.8	28.5
織	—	2.1	7.3	4.2	3.3
ン	1.5	1.3	2.0	1.6	1.2
綿	0.5	—	2.3	10.0	21.9
糸	—	—	—	—	2.3
子	0.9	2.8	1.3	1.6	1.6
物	3.7	19.6	8.0	0.8	—
魚	2.6	1.0	0.7	1.1	1.0
糖	0.9	0.6	0.8	2.3	4.5
鉛	2.5	1.6	1.7	1.6	0.6
鉄	1.6	4.4	8.0	6.3	6.1

まず、中世以来イギリス輸出貿易の大宗をなしていた毛織物は、一七〇〇年にはしだいに比重が低下しつつあったとはいえ、なお $\frac{3}{4}$ を占めていた⁽²⁾けれども、一八世紀後半以降輸出货量の増大にもかかわらず、その相対的地位は急速に下落してゆき、一八〇〇年にはその輸出構成比は三〇%を割る程の凋落を示している。これは伝統的な毛織物工業がもはやイギリスの中心産業でなくなったことを示しているであろう。

こうした毛織物輸出の比重低下に対して、一八世紀末以降いち

じるしい躍進的增加をみせているのが、綿織物・綿糸の輸出である。それは一七六〇年代頃に急速に増加しはじめ、八〇年、九〇年代の上昇は驚異的でさえある。一八〇〇年は綿製品の輸出額は公定価値においても毛織物とほとんど肩を並べ、一八〇二年にはついに毛織物を追いこして第一位に進出する。当時進行しつつあったイギリス産業革命の姿は、かかる綿製品の輸出統計のうえにもっとも集中的に反映されているであろう。

リンネンおよび絹織物の輸出は、国家から特別の奨励をうけていた。なかでもリンネンは、輸出品目中一七七二年には第四位を占め、一八〇〇年においても第五位を占めていた。

食糧品——まず穀物は、一七五〇年代頃までは収穫期の状態によって変動はあったが、輸出趨勢は上向きで、一七五〇年には全輸出の約二〇%を占めるといふ異常な輸出ブームを現出した。けれども、一七六五年以降国内の供給は増大する人口の必要を充たすことができず、その間一時的な豊作による輸出がみられたにしても、さきにものべたように一八世紀末にはイギリスはまったく大量の穀物輸入国になってしまふ。

精糖輸出は、一七〇〇年の〇・九%から一八〇〇年には四・五%へと着実に増大している。これは西インドにおける糖蜜生産の発展と、ブリストル、ロンドンにおける精糖業の発展によつて精糖の輸出が増大したためである。とくに一七八〇、九〇年代に急速に発展した。

鉄——一八世紀のはじめには、イギリスは外国への販売よりか多くの鉄を外国から輸入していたが、一八世紀末になると、イギリスの鉄および鉄製品の輸出は、輸入の五倍に達し、輸出額において繊維製品について第二位を占めるにいたつた。イギリスが鉄の輸入国から輸出国へ逆転したのは、アブラハム・ダービーによつて始められた技術革新の結果であつて、年代的にはほぼ一七四〇年代が逆転期であつたように思われる。鉄の輸出は主と

して鍛鉄、金物、釘から成り、輸入はスウェーデン、ロシアからの良質の木炭鉄から成っていた。輸入鉄は海軍や高質鉄鋼業者に需要があった。

なお、第一〇表にはあらわせなかったが、石炭の輸出も輸送面と高い輸出関税の障壁があったけれども、着実な発展をみせ、一八世紀中にほとんど六倍の増加をみた。

まとめ——一八世紀後半から同世紀末におけるイギリス輸出貿易の主な特徴はつぎの二点である。

1 輸出の中心は繊維工業の生産物である。しかし、毛織物は量的には増大したが、相対的に比重が低下し、これに対して新興の綿製品は急激な上昇を示している。産業革命における木綿工業の役割と毛織物工業のたおくれを反映している。

2 産業革命の進行を示す他の指標としての鉄工業——第一部門における先進的な技術革命、その結果としての鉄の輸入国から輸出国への転換。

註(一) E. B. Schumpeter, *op. cit.*, p. 12. 以下の叙述は *Ibid.*, pp. 12-13. におけるアシュトンのコメントに負うところ大である。

(二) 上の数字は、一五五頁の R. Davis の数字と約一〇%のひらきがあるが、計算方法のちがいにともづくものと思われる。

(三) 市場 構造

第一一表⁽¹⁾a bは、さきにかかげた一八世紀はじめのイギリス海外貿易(第二表)と対比すべく、一八世紀末の海外貿易を地域別に分類したものである。ここでわれわれが検討したい点はつぎの二点である。まず第一に、一八世紀後半以降における輸出入の構造変化が、海外市場の構造変化とどのような関連をもっているか、つまり輸出入の構造変化を海外市場の側面から検討することである。第二は、一八世紀はじめ——重商主義時代における海外

〔第11表〕 a

18世紀末のイギリス海外貿易, (1796—1800年の平均, 単位 £000)

	I	II	III	IV	V	VI	計
	北西ヨーロッパ	北ヨーロッパ	南ヨーロッパ	ブリテン諸島	栽植民地	東インド	
輸入	2,526	3,345	1,688	2,574	7,854	4,834	22,821
輸出 (再輸出を含む)	11,262	1,850	2,628	3,139	11,164	2,211	32,254

- 備老 I 北西ヨーロッパ……フランダース, フランス, ドイツ, オランダ
 II 北ヨーロッパ……イースト・カントリー(ポーランド, プロシヤ), スウェーデン, ロシヤ, デンマーク, ノールウェー
 III 南ヨーロッパ……ポルトガル, スペイン, 海峡諸島, イタリア, トルコ, ヴェニス, アフリカ
 IV ブリテン諸島……アイルランド, その他の小島
 V 栽植民地……イギリス領西インド諸島, アメリカ合衆国, カナダ, ニューファンドランド
 VI 東インド

市場と比較しつつ、一八世紀末—産業革命開始期の海外市場の構造変化を検討することである。さしあたり、各地域別の貿易構造を順を追って検討してゆこう。

I 北西ヨーロッパ

この地域との貿易は、一八世紀はじめには総輸出(再輸出も含む)の約半分、輸入は約 $\frac{3}{4}$ を占め、イギリス海外市場のうちでもっとも重要な市場であったが、一八世紀末には、輸出は $\frac{3}{5}$ 弱、輸入にいたっては一—%しか占めなくなり、その地位はいちじるしく後退した。そして一八世紀はじめには、大陸との取引の中心はオランダであったが、いまやドイツが圧倒的な地位を占めるにいたった。というのは、一八世紀をつうじてイギリス人はとくに仲介貿易においてオランダ人の強力な競争に直面し、フランス革命戦争・ナポレオン戦争中は、アムステルダム貿易の多くがハムブルグに移ったからである。また一七九〇年以降、イギリスの中央ヨーロッパとの取引もドイツの諸港をつうじ

〔第11表〕 b

18世紀末のイギリス海外貿易，地域別内訳（単位£000）

	輸 入	輸 出 (再輸出 を含む)
I フランダース	16	206
フ ラ ン ス	37	407
ド イ ツ	2,063	9,457
オ ラ ン ダ	410	1,192
計	2,526	計 11,262
II デンマーク，ノールウェー	154	510
イースト・カントリー (ポーランド，プロシヤ)	1,054	537
スウェーデン	255	84
ロ シ ヤ	1,882	719
計	3,345	計 1,850
III ポルトガル	698	811
ス ペ イ ン	526	109
海 峡 諸 島	36	208
イ タ リ ヤ	208	393
ト ル コ	106	127
ヴ ェ ニ ス	42	15
ア フ リ カ	72	965
計	1,688	計 2,628
IV アイルランド	2,385	2,934
その他の小島	189	205
計	2,574	計 3,139
V イギリス領西インド諸島	5,898	4,379
アメリカ合衆国	1,685	5,722
カナダ，ニューファウンド ランド	271	1,063
計	7,854	計 11,164
VI 東 イ ン ド	4,834	2,211
合 計	22,821	32,254

ておこなわれ、こうしてドイツは急速に輸出市場として圧倒的な地位を占めるようになった。ドイツへの輸出品は主に綿織物、毛織物、砂糖であった。

フランスとの貿易は、一七八六年のイーデン条約と一七九三年の戦争勃発の短い期間に活潑な取引がおこなわれた以外、両国の政治・外交・関税上の長期にわたる軋轢によって、貿易は少額にとどまっていた。

Ⅱ 北部ヨーロッパ

この地域との取引の性格は一八世紀はじめと変らなかつた。すなわち、イギリスは相かわらずここから木材、船舶必需品、良質の鉄鉄の供給をえていたが、一七六〇年以降は主としてロシアとの取引の増大のために輸入は増加した。しかし輸出はたいして延びなかつた。

Ⅲ 南ヨーロッパ

一八世紀はじめには全輸出額の $\frac{1}{4}$ を占め、イギリス第二の輸出市場であつた南ヨーロッパは、いまや $\frac{1}{10}$ にも充たない額しか占めない。かかるスペイン、ポルトガル市場の後退は、イギリス毛織物工業の地位の相対的低下と関係があるが、直接的にはイギリスとスペインとのあいだの相つぐ戦争のためである。ただアフリカとの貿易が一七六〇年以降輸出がいちじるしく増大し、一八世紀末にはやや減少したが一〇〇万ポンド近くを占め、この方面では最高の輸出額を示している。

Ⅳ アイルランドその他の小島

この地域との貿易は、一八世紀はじめには年輸入額は三〇万ポンドであつたが、一八世紀末には二五〇万ポンドとなり、一方輸出額は二五万ポンドから三〇〇万ポンドへといちじるしく増大している。アイルランド植民地はイギリス工業製品の市場となり、イギリスへは家畜、バターその他の農産物を輸出して、増大する人口の食糧

需要を助けた。たんに貿易面において意外に大きな役割を果たしたのみならず、激増する北部工業地帯の労働力需要に対して、多量の安い労働力を供給することによって、アイルランドはイギリス産業革命の陰の功労者となっていることを忘れるべきではない。

V 栽 植 植 民 地

この地域との貿易は、一八世紀末には他の地域をはるかに圧してもっとも重要な市場となった。輸入、輸出ともほぼ巧近くを占めており、かつての南ヨーロッパ市場と盛衰が入れかわったかたちである。

まず西インド植民地との貿易は、イギリス本国の精糖業および木棉工業が大きな発展をするにつれて、ますます原料供給地としての役割が増大し、貿易額も着実な上昇を示した。一方、アメリカ植民地はイギリス重商主義の束縛から脱して独立戦争を起したので、その間に貿易は停滞したけれども、独立達成後は再びイギリスとの貿易が回復した。アメリカはイギリスへ棉花、穀物など第一次生産物を輸出し、イギリスからは繊維製品、鉄製品など工業生産物を輸入し、国際収支は大幅の輸入超過であった。彼らはこの逆調をイギリス領西インドへ木材、魚類などを輸出することによって埋め合わせた。イギリスは西インドとは輸入超過で、こうした三角貿易の決済によって、東インドへのごとく正貨を輸送する必要は殆んどなかった点が特徴である。ちなみに、一九世紀中頃になれば、アメリカの国内における産業革命、生産力の順調な発展のためにイギリスとの貿易収支は黒字になる。

VI 東 イ ン ド

この方面との貿易はあいかわらず東洋の特産物の輸入超過（輸入貿易では栽植植民地について第二位）で、銀の輸出をもって支払われていた。けれども、一八世紀のはじめと終りとでは輸入品目に大きな変化があらわれていた。すなわち、一八世紀はじめはインド産のキャリコが中心であったが、一八世紀後半からはシナ産の茶が大量に輸入されるにいたった。また、一八世紀末にはイギリス工場製の産物である綿織物がベンガルに市場を見出しはじめたことは、この方面の貿易もいまや大きな曲り角にきつつあったことを示している。

註(一) E. B. Schumpeter, *British Overseas Trade Statistics, 1697-1808*. (1960), pp. 17-18. より作成。